

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：42663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530999

研究課題名（和文） 高度情報化社会に必要な国語力としての視覚的リテラシーをデザインした系統表の開発

研究課題名（英文） A study on the development of a system of visual literacy based on language ability

研究代表者

奥泉 香（OKUIZUMI KAORI）

日本体育大学女子短期大学部・教授

研究者番号：70409829

研究成果の概要（和文）：本研究では、高度情報化社会において国語力として求められる視覚的リテラシーを調査し、教師が実践において活用し易いようその系統性に焦点を当てて検討・整理した。本研究中では「視覚的」という語を、絵や写真、図、表等を総称する語として用いた。イギリス・ロンドン大学教授のクレス(Kress, G)や、オーストラリア連邦・ニューイングランド大学教授であるアンズワース(Unsworth, L)等の研究を援用し、その基盤となる選択体系機能言語学から国語教育に応用できる点を整理した。

研究成果の概要（英文）：This study is on visual literacy, especially on the literacy of a mother tongue due to a rapidly changing highly information-oriented society. In our research, the word “visual” means picture, chart, photo, and anime. We investigated it based on language ability and using the theory of systemic functional linguistics which Kress and Unsworth have studied. Kress is a professor of London University U.K. and Unsworth is a professor of University of New England, Australia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1300,000	390,000	1690,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2100,000	630,000	2730,000

研究分野：社会科学系

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：視覚的リテラシー、国語科教育、カリキュラム、系統性、相互補完性

## 1. 研究開始当初の背景

「脱工業」社会、「知識基盤」社会といった社会的枠組みが、かつてない速度・範囲で変化しつつある中、求められるリテラシーの学習が議論されていた。この問題に取り組んできた言語教育の研究者グループ、ニューロンドングループ（New London Group）は、1996年に新たなリテラシー学習の枠組みを提案した（Harvard Educational Review, 1996）。この中で、同メンバーのクレス（Kress, G）は、上述のような知識基盤（knowledge-based）、情報駆動（information-driven）の影響力が

増す社会では、情報は人々の思考や感情をより効果的に駆り立てるよう、視覚化（visualization）という現象を起こすと指摘し、そういった現象に対応できるリテラシーの必要性を提言した。本研究ではこの提言を受け、情報の視覚化に伴う感情や思考、価値や信念体系への影響を、意識化し吟味できるリテラシーの研究に着手した。そしてこの力を、言語の力との関係で明らかにすることによって、社会・文化的多様性に対応できる学力の基盤とすることができると考え応募した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、上述のような「脱工業」社会・「知識基盤」社会において、国語力として求められる視覚的リテラシーを、系統的に整理し、教師が活用しやすいようなメタ言語を含む解説や、系統性を整理・提示することである。対象は、小学校中学校の義務教育期間とした。「国語力として」と焦点を定めたのは、これまでの映像教育と差別化し、言語力との関係を核として明示し、母語教育として最低限保障すべき、基礎的な視覚的リテラシーを系統的に検討・整理するためである。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的のため、視覚社会学的、教育工学的、カリキュラム論的といった異なる研究分野からの当該分野における調査・検討を行い、各々の知見からの統合点を探り整理・検討した。また、既に母語教育のカリキュラムに視覚的リテラシーを位置づけ実践している国や州へ調査に赴き、具体的な教材やテキスト、カリキュラム等を入手・調査した。それらに共通する系統性を分析・抽出し、日本の学習者に有効な系統性を考えるためである。具体的には、英国（イングランド及びウェールズ）、フィンランド、オーストラリア（西オーストラリア州、ニューサウスウェールズ州、クィーンズランド州）、アメリカ（ニューヨーク州）、カナダ（オンタリオ州）ニュージーランドへの調査を実施した。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、主に以下に示す三点に要約して報告することができる。

### (1) 言語との往還性を持つ基盤理論と、メタ言語の整理

前述したように、本研究では英語圏を中心とした諸外国の母語教育カリキュラム、さらには視覚的リテラシーに関連する教材、それらを用いた実践を調査した。そしてその過程で、英語圏の母語教育カリキュラムにおける視覚的リテラシーに、通底し影響力をもつ理論を知ることができた。それはM. A. K. ハリデーの提唱する選択体系機能言語学であり、その理論を援用したクレス(Kress, G)やアンズワース(Unsworth, L)等の研究である。この選択体系機能言語学では、言語を中心とするすべての意味構築の「組織立ての根幹」には、「意味は全て<選択>によって作りだされる」という考えが位置付いている。そして同理論では、「選択肢の集合」を「システム」と呼び、その中から「選択された諸要素の合体」を「テキスト」と位置づけている。「コンテキスト」のことを「選択の要因の集合」と規定し、選択はランダムに存在する「コンテキスト」の要因によって引き起こされるの

ではなく、相互に共通特性をもった因子群からなる組織だった要因によって引き起こされると説明している。

また同理論では、意味の基本単位である「節は、異なる機能的領域で作りだされる三つの異なる種類の構造の組み合わせによる混合物である」と整理している。そして、以下の①～③の三つの機能的領域を、「メタ機能」と呼んで、次のように説明している。

- ① 観念構成的メタ機能(ideational)
- ② 対人的メタ機能(interpersonal)
- ③ テキスト形成的メタ機能(textual)

クレスは言語同様視覚的テキストも、この三種類の機能領域から同時複合的に意味構築を行うことが可能であると述べている。

さらに、上記①の「テキストで展開される出来事やそこに関与するもの、場や環境」の質的な意味構築を、「過程構成(transitivity)」と呼ばれるシステムで、以下の要素を包摂する概念として提示している。それは「過程中核部(process)」と呼ばれる主に動詞群で表される過程と、それに結び付く「参与要素(participant)」、さらには「状況要素(circumstance)」という相互作用的な三つの概念である。「参与要素」とは、言語化した場合その多くが名詞群に対応する行為者や対象等のことで、行動や会話、思考、リアクション等の「過程に参与する存在」という意味でこの語に和訳されている。そして「状況要素」は、主に副詞群や前置詞句に対応し、視覚的テキストでは場や時、様子等に関する意味構築を担っている。

この理論は、視覚的リテラシーの教育に大きく二つの点で貢献していると考えることができる。一点めは、視覚的テキストの読解や発信過程において、学習者相互や教師とのやり取りの中で、上記の用語がメタ言語としての役割を果たすことができるという点である。これまでは、このような言語との往還性のあるメタ言語や、その体系を示す理論が整備されていなかったため、映像技術の用語等に頼る部分が多く、必ずしも言語力との関係で充分議論することが難しかった。

また二点めは、上記の概念や用語を援用することによって、視覚的リテラシーの系統性を言語との関係で整理する糸口が得られたことである。例えば、上掲の三つのメタ機能を使って小学生、中学生に視覚的テキストの読解の授業を試行してみると、①の観念構成的メタ機能の学習は、②の対人的メタ機能の学習や③のテキスト形成的メタ機能の学習に比べ、比較的学齢の低い学習者でも理解しやすい傾向が見られた。また②の対人的メタ機能の学習や③のテキスト形成的メタ機能の学習では、学齢が高い学習者の方がより社会・文化的コンテキストを考慮に入れた解釈・構築を示す傾向が見られた。さらに、「過

程構成」の学習では、「参与要素」に関する理解や言語化よりは「状況要素」の意識化や言語化が難しく、これら両者の関係性から意味を解釈・構築する学習は、小学校高学年以降理解できる学習者が増加する傾向もみることができた。

まだ本研究の段階では、上記のような調査・分析は全ての学齢において充分行えているわけではなく、仮説的に系統性を整理するために参照する目的で試行している段階である。しかし、上掲の理論的枠組みやそれに付随するメタ言語等の援用によって、視覚的リテラシーを言語との往還性を持って整理する可能性は示すことができた。

## (2) 教材や指導書にみる系統性の整理

(1)で紹介・提示した理論的枠組みは、特に現在オーストラリア連邦で改訂作業が進められているナショナルカリキュラムにおいて、体系的に取り入れる試みが進行している。また、イギリス（イングランド及びウェールズ）やアメリカ（ニューヨーク州）、カナダ（オンタリオ州）における調査でも、その実践への援用や影響を見ることができた。

そこで(2)では、こういった英語圏の動向とリンクしながらも、独自に視覚的リテラシーの育成に取り組んできたフィンランドの学習指導要領にあたる Opetussuunnitelman perusteet (教育計画の基盤・指針, 2004: 以下訳は北川達夫)、さらには教科書・教材等から、そこに見られる系統性を整理し報告する。フィンランドでは PISA の調査でも知られているように、読解リテラシーの指導の卓越性が言語のテキストだけでなく、視覚的テキストについても認められている。具体的には、視覚的リテラシーに関する記述は、国語科に当たる科目 äidinkieli ja kirjallisuus (母語と文学) 中の、「相互作用の技能」と「読解力」という領域に記述されている。フィンランドの同科目の領域は、例えば3～5学年では以下の6領域設定されている。「相互作用の技能」「読解力」「作文と発表」「情報活用 of the skill」「言語の機能と構造」「文学と異文化」である。

上記「相互作用の技能」と「読解力」領域の記述と、教科書や教材を対応させて見ていくと、フィンランドの「母語と文学」では、視覚的リテラシーに関して、次のような学習の系統性が見えてくる。①低学年～中学年では、主に絵やタイトルから根拠を押さえて、内容や伝える相手を予測させる学習。②中学年では、主に絵や図の比較・分析の学習。③高学年では、主に絵や図と言葉や文章との対応関係を分析した、統合的な解釈の学習である。

本研究では、これらフィンランドで開発・実践されてきた視覚的リテラシーの学習や

その系統性を参照することによって、(1)で紹介・提示した理論的枠組みやメタ言語の整理、取り入れ方、系統性の検討に、さらに母語教育としての側面を強化することができた。例えば、フィンランドの取り組みを参照することによって、視覚的リテラシーに根拠を押さえた予測や推論といった観点を、系統的に組み込むことができた。

## (3) 他教科との体系的連携の可能性

視覚的テキストに表象される事物は、物質世界における出来事だけでなく、心理過程や関係過程など抽象的な概念にも及ぶ。したがってその学習は、推論や分類的思考等様々な思考力を必要とする。アンズワースはこの点に注目して、視覚的テキストにおける参与要素間の関係や種類、階層を、言語を用いて検討させる学習は、母語学習において重要であると述べている。そしてそういった学習は、理科や社会科等他教科においても、基盤として連携・発展させることができると述べている。

例えばアンズワース (2004) では、関係過程の枠組みに着目して、以下のような階層構造の学習を提案している。図1は理科の教科書にある雲の説明図である。数種類の雲が表象されているため、学習者は雲の出る位置や、雲の形状によって複数の雲を比較し分類するという思考や学習が必要となる。漫然と図を眺め、表象されている雲の数や個別の形状を解釈・構築するだけでは不十分である。しかし学習者、特に年少者にとっては、この図の表象のされ方は、こういった学習に必ずしも適していない」とアンズワースは述べている。それは、先述の状況要素という枠組みを

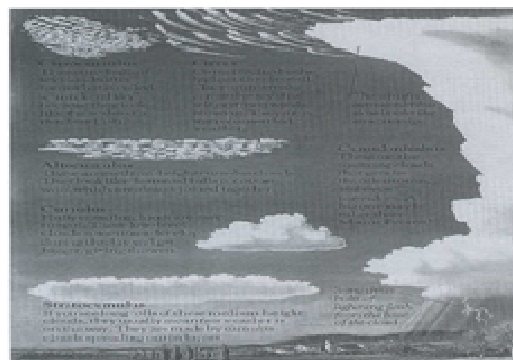


図1

用いると理解し易い。現実の風景に似た背景は、一見学習者にとってわかりやすいように見える。しかしこのテキストでは、背景がテキスト中の時間軸を操作していることをわかりにくくさせている。同時にこれらの雲が空に出ることは無く、また各々の雲が出る際には異なる気象状況が発生しているはずだからである。したがってアンズワースは、状況要素を学習の目的に応じて操作し、例えば

参与要素相互の関係を以下のように抽象化して視覚化させ、上図との変換という往還的な学習を母語学習で行わせる必要があると述べている。

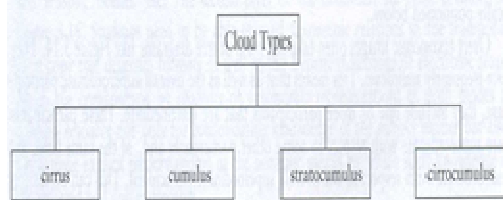


図2 雲の種類分類図

社会的実践の場では出会う視覚的「テキスト」の多くは、明示的には分類や階層構造が示されていない場合(covert taxonomy)が多い。しかし、実際に「これらのテキストから意味構築すべきは、表象されている物質世界における事柄ではなく、その背後に編み込まれている概念的な関係性であることが多い」と、アンズワースは述べている。このように、(1)で提示した理論的枠組みを援用することによって、具象化された視覚的テキストを用い、分類や階層構造の学習を言葉との関係で、他教科と連携して行う可能性を拓くことができた。

#### (4)まとめと今後の課題

以上のように、本研究で行った視覚的リテラシーの系統性に関する調査・分析・整理を、三つの観点からまとめ報告した。そして調査した理論的枠組みやメタ言語の援用によって、言語との関係で系統性を整理し、他教科との体系的な連携の可能性も示した。

今後は本研究を基盤として、理論的枠組みやメタ言語を適宜組み込んだ実践や、そのための教材セットを、系統的に開発したいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 32 件)

奥泉 香 「視覚化する書記テキストの学習 — 批判的談話分析とデザイン概念を援用して —」『国語科教育』第 71 集, 全国大学国語教育学会、2012. 10 (刊行予定, 原稿提出・採択済) 査読有

奥泉 香 「映像テキストの学習を国語科で行うための基礎理論の整理」『国語科教育』第 68 集, 全国大学国語教育学会、2010. 10, pp. 11-18 査読有

奥泉 香 「韓国の国語科教育改訂にみる『メディア言語』学習の拡充」『国語教育研究』

No. 452, pp. 50-57 査読有

北澤 裕 「<器官なき身体>への眼差し」

『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』巻 21, pp. 11-39 査読無

北川 達夫 「言語力・対話力・読書力 いまどのような力が求められているか」『「言葉の力」再生プロジェクト 活動報告書』 2011. 11, 東京都, 資料編, pp. 1-3 査読無

〔学会発表〕(計 11 件)

奥泉 香, 岡本 能理子, The creation of new values in Japanese texts through the use of multimodal communication, 5<sup>th</sup> Global Conference Visual Literacies -Exploring Critical Issues-, 2011.7, University of Oxford, UK 査読有

中川一史, SUNG-HO KWON, Makiko KISHI, Yukie SATO, A Comparative Study of Criteria on Visual Literacy in Language Learning, between Japan and Korea, International Conference for Media in Education, 2011.8. Korea, 査読有

〔図書〕(計 6 件)

佐藤 慎司, 熊谷 由理, 奥泉 香 他 『言語教育における異文化コミュニケーション能力再考』ココ出版, (2012. 8 刊行予定: 原稿提出済)

平田 オリザ, 北川 達夫 「ニッポンには対話がない」, 2008, 三省堂

北川 達夫, 清宮 普美代 「対話流」 2009, 三省堂

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

奥泉 香 (OKUIZUMI KAORI)  
日本体育大学女子短期大学部・教授  
研究者番号: 70409829

##### (2) 研究分担者

北澤 裕 (KITAZAWA YUTAKA)  
早稲田大学総合学術院・教授  
研究者番号: 20204886  
中川 一史 (NAKAGAWA HITOSHI)  
放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター・教授  
研究者番号: 80322113  
北川 達夫 (KITAGAWA TATSUO)  
日本教育大学院大学・客員教授  
研究者番号: 70537399